

氏名	しん どう み か 進 藤 三 佳
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 300 号
学位授与の日付	平 成 17 年 7 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学位論文題目	Semantic Extension, Subjectification, and Verbalization (意味拡張・主体化・動詞化)

論文調査委員	(主 査) 教 授 山 梨 正 明	教 授 大 木 充	助 教 授 河 崎 靖
--------	----------------------	-----------	-------------

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、認知意味論の枠組みに基づき、日常言語の五感にかかわる感覚形容詞の意味拡張と意味変化のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。認知言語学のアプローチでは、言葉は形式と意味の対応関係からなる閉じた記号系ではなく、人間の身体的な経験を基盤とする認知能力と運用能力に根ざす開かれた記号系として位置づけられる。本論文は、この新しい言語学のパラダイムに基づき、英語の感覚形容詞を中心とする日常言語の意味のメカニズムの解明を試みている。全体は、6章から成る。

第1章では、認知言語学のアプローチの基本的な言語観と認知言語学のパラダイムの背景となる基本的な概念についての説明がなされる。さらに本章では、認知言語学の科学観と言語観に基づいて、本研究の記述、説明の基盤となる認知意味論の基本的な枠組みの説明がなされる。

第2章では、日常言語の意味変化と意味拡張の研究の中で特に際立った成果をあげている意味の漂白化とこれを反映する文法化に関する先行研究を批判的に検討し、これまで純粋に文法の意味部門における分析対象として扱われてきた意味変化と意味拡張のプロセスが、語彙レベルと句レベルにおける形態・統語的变化(特に、内容語の接辞化、連語の複合語への変化、等)を動機づける要因として機能する事実を明らかにしている。本章では、さらに知覚経験にかかわる語彙の意味拡張に関する先行研究を批判的に考察する。この考察に基づき、従来のこの分野の研究の大半が知覚動詞を対象としたメタファー分析に限定されている点を指摘し、知覚動詞だけでなく感覚形容詞をも含む述語の体系的なメタファー分析を試みている。本章では、さらに、形容詞、動詞、等の語彙の意味変化と意味拡張を動機づけている認知プロセスとして、以上のメタファーの認知プロセスだけでなく、メトニミー、イメージ・スキーマ形成、スキーマ変換、等の認知プロセスの諸相を体系的に分析している。

第3章では、従来の認知意味論の研究で知覚動詞に適用されてきたメタファー分析が、感覚形容詞(warm, hot, cool, cold, bright, clear, 等)の意味拡張のプロセスにも適用可能かを共時的視点から検討し、メタファーにかかわる意味拡張の他に、どのような意味拡張の方向性が感覚形容詞の意味の創造性のメカニズムを動機づけているかを考察している。以上の考察に際し、方法論としては、作例による言語事実の分析だけでなく、言語処理技術を用いたコーパスデータの自動分類による意味分析を適用する。この分析により、温度感覚の領域から感情、情緒、等の意味への拡張の方向性、視覚領域から知性、判断、思考、等への意味の拡張の方向性が明らかにされている。また、本章では、以上のコーパスデータの自動分類の分析に基づき、意味拡張の分化を推進する認知的な動機の一つとして、感覚経験に対する言語主体のドメイン・シフト(ないしは、ドメイン・マッピング)の認知プロセスが重要な役割を担っている事実を明らかにしている。

第4章では、通時的な視点から、前章で考察した英語の感覚形容詞の意味拡張のプロセスの方向性を考察している。特に本章では、触覚、味覚、視覚、次元感覚に関わる形容詞(keen, eager, clear, plain, 等)の意味拡張のプロセスを分析し、このタイプの形容詞の意味拡張には、感覚の客体的叙述から話者の感情や視点を反映する主観的叙述への方向性が認められ

る点を指摘している。また、この種の形容詞の意味拡張は、他の品詞の意味拡張に一般的に認められる具象から抽象への意味拡張の単一的な方向性の仮説では一律に予測できない事実を明らかにしている。さらに本章では、感覚の客体的叙述から主観的叙述に推移する感覚形容詞の一部（calm, clear, smooth, 等の形容詞）の動詞化（verbalization）（すなわち、形容詞の文法カテゴリーから動詞の文法カテゴリーへの転換の過程）を、主体化（subjectification）の認知プロセスを組み込む意味拡張のスキーマモデルに基づいて定式化している。

第5章では、感覚形容詞の通時的・年代順のデータの綿密な分析に基づき、知覚・感覚領域にかかわる形容詞に関する次の諸点を明らかにしている。まず、知覚・感覚的な概念領域から主観的な概念領域（ないしは抽象的な概念領域）への意味の推移を動機づける基本的な認知プロセスとしては、メタファー的拡張と主体化の認知プロセスが認められるが、その動機づけの順序としては、一般的にメタファーによる動機づけが先、主体化による動機づけが後に起こるという適用順序の制約がみられる。また、一見したところ、同じ知覚・感覚領域に起源をもつ形容詞でも、対象ないしは事態を客観的な視点で概念化する形容詞と、その対象ないしは事態をより主観的な視点で概念化する形容詞の間には、他動詞化への可能性（すなわち、形容詞から他動詞への文法カテゴリーの転換の可能性）に関する違いがみられる。一般に、後者のタイプの形容詞の一部には、この種の文法カテゴリーの転換がみられる。本章では、この事実に対し、基本的に対象世界を主観的な視点で概念化する形容詞には、認知主体を述語の新たな項として前景化する傾向があり、この項が明示的に言語レベルでコード化される結果、一項述語の形容詞から多項述語への他動詞化が可能となるという一般的な説明を与えている。

最後の第6章では、理論面・実証面の双方の観点からみた言語現象の記述と説明に関する本研究の意義と一般的な展望が論じられている。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、認知意味論の枠組みに基づき、人間の最も具体的で基本的な身体経験である五感にかかわる英語の感覚形容詞の意味拡張と意味変化のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。理論言語学における従来の意味論の研究では、形式意味論、生成語彙論、等にみられるように、意味分析に際し、言語主体とは独立した抽象的な意味標識による属性規定が試みられている。しかし、これまでの研究では、言語主体と外部世界の相互作用を反映する感覚形容詞の語彙の意味分析は体系的にはなされていない。本研究は、後者の身体論的な視点に基づく感覚形容詞の実証的研究である。

感覚語彙の意味分析に関する従来の研究の大半は、感覚にかかわる動詞、名詞を中心とする語彙の意味分析が中心になっており、感覚形容詞を対象とする語彙の意味拡張と意味変化に関する体系的な研究はなされていない。本研究の独創的な点は、従来の研究で等閑視されていた感覚形容詞の語彙の意味変化と意味拡張の諸相を、意味のメタファー写像、主体化、ブリーチング、スキーマ拡張、等の認知プロセスとの関連で体系的に分析している点にある。

さらに本研究で注目すべき点は、同じ感覚領域に起源をもつ形容詞でも、対象（ないしは事態）を客観的な視点で概念化する形容詞と、その対象（ないしは事態）をより主観的な視点で概念化する形容詞の間には、他動詞化への可能性に関する違いがみられるという事実、および、後者のタイプの形容詞の一部には文法カテゴリーの転換がみられる事実を明らかにした点にある。認知意味論のこれまでの語彙の意味分析では、この種の事実に関する説明は与えられていない。本研究では、この種の事実に対し、基本的に対象世界を主観的な視点で概念化する形容詞には、認知主体を述語の新たな項として前景化する傾向があり、この項が明示的に言語レベルでコード化された結果、一項述語の形容詞から多項述語への他動詞化が可能となるという一般的な説明を与えている。この説明は、日常言語の他動詞化のプロセスを動機づける認知的制約の一面を明らかにする規定として注目される。

また、本研究では、感覚形容詞の身体的な概念領域から抽象的な概念領域（ないしは主観的な概念領域）への意味の拡張を動機づける基本的な認知プロセスとして、概念領域間の変換に基づくメタファー的写像と認知主体の視点の主観的な投影に基づく主体化の認知プロセスを明確に区分している。これまでの認知意味論の研究では、語彙の意味拡張を動機づける認知プロセスのうち、前者のメタファー的写像の認知プロセスの存在は認められているが、後者の認知プロセスの存在は明らかにされていない。本研究は、この後者の認知プロセスが、感覚形容詞の意味レベルの言語変化にかかわるだけでなく、形態論のレベルにおいて、形容詞の文法カテゴリーから動詞の文法カテゴリーへの品詞転換を動機づける要因になるという事

実を明らかにした点に重要な意味が認められる。

本論文では、さらに英語の感覚形容詞の意味拡張のプロセス（特に、触覚、味覚、視覚、次元感覚に関わる形容詞の意味拡張のプロセス）の方向性を分析し、このタイプの形容詞の意味拡張には、感覚の客体的叙述から言語主体の感情的叙述ないしは主観的叙述への方向性を明らかにしている。この種の意味の拡張の方向性は、従来の語彙の意味分析の研究で主張されている具象から抽象への意味の拡張の方向とは異なる性質の意味の推移プロセスであり、他の品詞の意味分析で主張されている具象から抽象への意味拡張の「一方向性の仮説」では一律には予測できない。

本研究は、次の点で、従来の理論言語学の意味分析を越える実証的な分析を試みている。第1に、共時的に観察するデータを、これまでの先行研究でよくなされている作例や典型的な限られた数の例文に頼らず、コーパス・シソーラスを用いて網羅的にデータを収集・分析し、より信頼性の高い結果を出している。第2に、単に現代英語を共時的に観察するだけでなく、通時的に時系列に沿ったデータを収集・分析し、言語データの偏りを避けるため、通時的コーパスを使用している。第3に、得られた意味変化のプロセスを、より明示的・体系的に分析するため、認知言語学の枠組みに基づき意味変化のプロセスを認知図式により定式化している。第4に、意味変化が単に意味の問題だけにとどまらず、語彙カテゴリーや統語構造にまで影響を与え得ることを共時的・通時的に観察されたデータから分析し、その変容のメカニズムに関する認知的説明を与えている。

本研究で明らかにされた意味拡張のメカニズム（特に、メタファー、主体化、焦点シフト、等の認知プロセスを反映する形容詞の意味拡張のメカニズム）は、言語の習得過程における意味発達のメカニズムを明らかにしていくための一つの検証の場を提供する。これまでの言語習得の研究では、動詞類や名詞類の言語表現の意味の習得過程の研究は進んでいるが、形容詞類の意味の習得過程の研究は殆どなされていない。本研究は、言葉の意味の習得過程と言葉の創造性の解明を図る言語獲得と認知発達の関連分野の研究への基礎的な研究としても重要な役割をになう。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の一つは、言語、知覚、思考、推論、等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学の関連分野への貢献がさらに期待される。

よって

本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年6月2日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。